# 私が関わったシステム開発プロジェクト

## システム開発プロジェクトの特徴

損害保険会社Ａ社はインターネットでの自動車保険や傷害保険などを販売している。市場のがんや先進医療に対する補償のニーズにこたえるため、このたび医療保険に新たに商品を増やすことになった。その際に今後の市場のニーズに迅速に対応できるように、汎用機で構築された現行の医療保険向けシステム（以降、旧システム）を、オープン系のＷｅｂシステムとして再構築することとなった。Ａ社は全国に数百件の代理店をもち、各代理店は新しいＷｅｂシステムを利用して、保険の申し込みの登録や、情報変更などを行う。本開発の総開発工数は約１５０人月、開発費用は約１．２億円である。工期は１年間。約８ヶ月で製造、結合テストを終え、続く４ヶ月で総合テスト、運用テストを行う。以上を踏まえ、当医療保険再構築プロジェクトを情報システム開発会社であるＢ社とＣ社が受注した。Ｂ社は新システムの基幹部分を構築し、Ｃ社はＥＴＬやワークフローなどの新システムの周辺システムを構築する。私はＢ社の社員であり、本案件のプロジェクトマネージャに任命された。

## プロジェクトの目標

計画されたプロジェクト予算内で納期までに開発を完了すること。

# リスクの分析

プロジェクトの立ち上げ時にリスク要因が存在し、プロジェクト目標の達成を阻害するようなリスクが想定される場合、リスクを分析し、対策を検討することが必要となる。

## プロジェクトの立ち上げ時に存在したリスク要因とプロジェクト目標の達成を阻害するようなリスク

1. 利用部門のメンバが多忙のため、開発に十分に参画できない。このため要件定義や外部設計の進捗が遅延し、コストが超過するリスクがある。
2. 採用した新技術について情報源が少ない。このため技術がうまく習熟できずに進捗が遅延し、品質が低下するリスクがある。

## リスク分析をどのように行ったか

前述の①②のリスクを以下のとおり定量的に評価した後に、発生確率、影響度についてリスク評価マトリックスにまとめ、対応の優先順位を分析した。

1. の定量分析評価：要件定義と外部設計それぞれについて、一定期間、進捗が遅延した場合に、進捗回復のためにかかる費用を算出。
2. の定量分析評価：新技術の適用が難しかった場合、新技術を使わずに開発を行う形に切り替えた場合に、追加でかかる費用を算出。

# リスク対応計画の実施状況及び評価

## 策定した予防処置や現実化したときの対策

予防措置：事前に詳細なスケジュールを提示し、利用部門が参画できないと進捗が遅れ、納期を守れなくなることを利用部門に伝える。

対策：利用部門の上司に状況を伝え、業務調整を依頼する。

予防措置：事前に、メンバに新技術の研修を受けさせる。

対策：社外から新技術の専門家をアサインし、メンバに加える。

## リスク対応計画の実施状況及び評価

実施状況：①②ともにリスクが現実化したため、上述の対策を実施した。

評価：冷静に対処し、最悪の事態を防げたので成功したと考えている。

以上